

# 21世紀の博物館

— 九州国立博物館などの取り組みを手がかりに —

臺信 祐爾

## はじめに

司会の小林洋一先生からご紹介いただきましたように、私は1973年3月に西南学院高等学校を卒業しました。本日の記念講演会会場は、高校時代、確か毎週火曜日午前中のチャペルの時間、朝礼や伝道集会など、様々な機会に座って話を聴いた思い出の場所です。本日二十数年ぶりに駆け足で見て回りましたが、ワックスの匂いと階段を上り下りする時のギシギシという音がそのままだったので、大変なつかしく感じました。また施工当時の設計図などがヴォーリス建築事務所に保管されていたところから、軒蛇腹や水平アーチの窓が印象的なジョージアン様式による煉瓦造りという創建当初の美しい姿に再現され、福岡市指定有形文化財になったとうかがいました。1921（大正10）年竣工だそうですから、学院創設者 C.K. ドージャー先生もここで執務されていたことがあったことと思います。ドージャー記念館という呼称もまことにふさわしいものと考えます。



ジョージアンコロニアルスタイルを基調とした古典様式の博物館

本日お集まりの皆様の中には西南学院中学校・高等学校長和佐野健吾先生をはじめ、高校時代にお世話になった先生方が何人も聞きにきておられるので、少々話しがやりにくく感じています。

## これからの博物館

本日、西南学院大学博物館（ドージャー記念館）の開館記念式典の講師としてこの場に参りましたので、21世紀という新しい時代にふさわしい博物館のありかたについて、従来の常識では考えられないほど多数の入場者を集めている北海道旭川市立旭山動物園、石川県金沢市の金沢21世紀美術館と、私が勤務している九州国立博物館（九博）を取り上げてご紹介したいと思います。そうすることで西南学院大学博物館の今後について皆さんが考える手がかりを多少なりとも提供できるのではないかと思ったからです。

### 「ミッションステートメント」の重要性

西南学院大学博物館の誕生にあたって、今後末永くその有意義な活動が続いていくために是非とも「ミッションステートメント」（博物館のあり方、会社で言えば社是にあたるもの）を考えていただきたいと願っています。本日開館したばかりの西南学院大学博物館にそれを求めることは無謀に感じられるかもしれませんが、取り組みの早い段階から志を高く持つこと、そして将来にわたってあるべき姿を考えながら、ぶれない軸をもって日々の活動を続けることは重要なことだと切に思うからです。

### ☆旭川市立旭山動物園 「伝えるのは命の輝き」

その参考として、年間260万人もの人々を惹きつけている旭山動物園の例をまず見てみましょう。博物館と動物園とは縁もゆかりもないと感じられるかもしれませんが、博物館が果たしている大事な機能の一つが集めた「もの」を来館者に見てもらふ点にあることから、動物園を「生きたもの（＝動物）を展示する」施設ととらえれば、動物園（水族館・植物園など）も博物館の仲間なのです。事実、1872年創立の東京国立博物館は、その初期において図書館、植物園、動物園（上野動物園の前身）などの機能を併せ持つ機関として構想されていました。動かない、音を出さない、しかも多くの場合古色蒼然かつ満身創痕の状態にある作品を取り扱う我々博物館関係者から見

と、動くもの（＝動物）を展示する動物園にはかなわない点も確かに多いのですが、同じ社会教育機関として、旭山動物園の活動への取り組みやその基礎となる理念を学ぶことは大事なことだと思います。

旭山動物園では、ペンギん館、ほつきよくぐま館、おらんうーたん館など、飼育管理上の都合からではなく、野生動物の生態から発想した施設を新たに作ったため、動物にとってストレスが少ない環境で、これまで動物園では眼にすることができなかったような角度から、これらの動物が生き生きと活動する様子を見ることができるようになりました。すなわち旧来型の動物園では当たり前だった、狭い空間に閉じこめられ、行ったり来たりするか寝ころんでいる、無気力な動物の生活ぶりを打破しようという目的のもと、さまざまな試みが行われてきたのです。野生の状態では素晴らしい能力を発揮する動物の行動を目の当たりにすることができれば、単に動物の姿形ではなく、それぞれの動物固有で特徴ある「行動を展示する」環境が整い、その「命の輝き」に人々が感動を覚えるようになって考えた関係者の努力が今日の大動員をもたらしたのです。北九州市立到達の森公園には、旭山動物園からのライブ映像（お客さんの歓声も聴こえます）が配信されています。ぜひご覧ください。

また飼育担当者は、獣舎のなかで動物を世話するだけでなく、お客さん同士が交す会話に出て来る素人ならではの疑問点に耳を傾けようとしているそうです。「こちらが知っていてほしいと思うことよりも、お客さんの側が知りたいと思うことに対して敏感であってほしい」という小菅正夫園長の思いがそこには感じられます。そして、そうしたお客さんの疑問に答える形で、わかりやすく読みやすい、手書きの小パネルがそこかしこに貼ってあります。また総合学習の一環として、動物たちのことを学んだ中学生による手書きの壁新聞も多数貼り出してありました。

飼育員さんが動物たちの生態や生活ぶりを来園者に説明する際には、最後に必ず地球環境保全や野生動物との共生の問題など、動物園ならではの話題を取り上げて、自然界、ひいては日常生活に対する来館者の関心を高めようとしていました。そして飼育部門・獣医部門・教育部門は、それぞれの研究成果について学会発表などを通じて積極的に社会に還元するようにしているそうです。

旭山動物園が来園者自身に身につけ、気づいて欲しいと願っていることがあります。①観察や調査など科学的思考方法をはぐくんで欲しい②さまざまな生命の在り方を再発見して欲しい③多様性や生態などの動物学の魅力を感じて欲しい。そして旭山動物園では、飼育・獣医・教育部門だけでなく、事務系職員やボランティアも含む動物園関係者全員が職務遂行にあたって「伝えるのは命の輝き」というテーマを根底においています。生きている野生動物の素晴らしさをどう人々に伝えるかを常に考えている旭山動物園のミッションステートメントと言えるでしょう。

## ☆金沢21世紀美術館

金沢市役所と兼六園のそばにあり、円形の建築平面をもち、外壁すべてがガラス張りというユニークな建築で知られる金沢21世紀美術館は、九博より1年早い2004年10月に開館し、開館後の2年間で300万人が来館しました。展示室・市民ギャラリー・シアター21・デザインギャラリー・キッズスタジオ・ライブラリー・メディアラボなどがあります。地下には駐車場200台分と自転車60台分の地下駐車スペースを設けているほか、生後3ヶ月前後から小学校低学年の子どもを対象に託児所を併設していることも、小さな子どもたちの世話に忙殺され美術鑑賞や独りになる時間を持ちにくい親に対する素晴らしい心配りだと強く感じました。また特別展に関連する導入の役割を果たす部屋を無料ゾーン内に設けて、潜在的な入館者に手を差し伸べていました。

地元産業界の活性化を目指すプログラムをデザインギャラリーで随時展開しており、メガネデザインのコンクール入賞作品のアイデアを地場産業が商品化するという共同作業はその一例です。ある期間美術館に滞在し、その設備を利用して新たな作品を芸術家に制作してもらうアーティスト・イン・レジデンスというプログラムも実施しています。その期間中、市民をはじめとする来館者は、その制作の様子などを間近に見、芸術家本人との接触を深めることも可能となります。こうしたさまざまな仕掛けを通して、金沢市民および来館者は、金沢21世紀美術館にさらに親近感を覚え、名実ともにサポーターとなっているように思いました。また周辺の商店街とタイアップして、商店情報を提供するとともに、割引で各種のサービスを受けられるなど、地元と密接な関係を築いている点も、大いに注目されます。

ジャンルを超えた世界の同時代美術に市民とともに向かい合う美術館、「まちの広場」としての役割をにないつつ産業界とも結びつく美術館、伝統工芸などの地域の固有文化と世界との結びつきを探る美術館、子どもとともに成長する美術館を目指しているそうです。これらを金沢21世紀美術館のミッションステートメントと見なすことができると思います。

## ☆九州国立博物館 開館

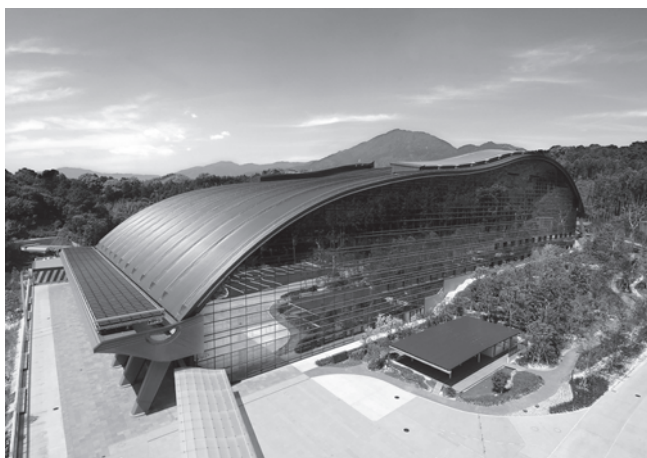
### 九博敷地について

九州国立博物館は、独立行政法人国立博物館傘下の四番目の国立博物館として2005年10月16日に太宰府市石坂の地に開館しました。開館後1年5ヶ月ほどで300万人もの方々が訪れました。約5万坪にのぼる敷地の大部分は、第38代宮司西高辻信貞氏が

ら、国立博物館建設用地として36年ほど前に福岡県に寄贈されました。黒田如水・長政父子から江戸時代初めに菅原道真公を祀る太宰府天満宮が拝領した15万坪の社領地の実に三分の一にあたります。そもそも太宰府の地に博物館をという構想は明治初年に太宰府天満宮で開かれた太宰府博覧会に端を発しており、太宰府天満宮西高辻司家4代が百数十年にわたって温めてきた夢の実現とうかがっています。開館までには、長い時間と人々の思いがあったのです。

### 省エネと安全性を意識した建物

建物平面は80×160メートルの長方形で、3000m<sup>2</sup>におよぶ南北両壁のガラス面には周囲の森や空が映り込むため、きわめて大規模な建物でありながら圧迫感を感じさせません。ガラス壁は二重構造（ダブルスキン工法）のため、外気温の変動の影響が内部に及ばないようにになっています。西側エントランス入り口屋根に設置された温水パネルによって暖められた水をエントランスロビーの床暖房に用いているため、空調の費用が抑えられています。チタン製屋根に載っている太陽光発電パネルによって消費電力の1%を自家発電するほか、雨水を貯め、処理水をトイレなどに利用しています。廊下にはセンサーが設置され、人が通ると照明が25%明るくなるように設定されるなど、全体に省エネルギーの考え方で建てられています。2階より上には、収蔵庫・事務室・会議室・展示会場・機械室など博物館の重要な機能が集中しています。この部分は、来館者や作品の安全を確保するために、硬い花崗岩の岩盤のうえに免震装置を



緩やかな曲線が特徴的なチタン製屋根

介して置かれており、一昨年の福岡西方沖地震の時にその有効性が実証されました。緩やかな曲線を描く鮮やかな青色の屋根について、設計者の菊竹清訓氏は、なだらかな九州山地の山並みから発想したとおっしゃっているそうですが、私には海の彼方から新たな技術・思想・宗教・社会の仕組みなどを携えた人々が乗り越えてきた、穏やかな大海原の波のように思われてなりません。

## 九博へのアクセス

当館敷地と太宰府天満宮境内には19mもの比高差があり、アクセスの点で大きな問題がありました。そのため健脚者用の階段のほか、長尺のエスカレーター2本と動く歩道2本を組み合わせた「天満宮アクセス」を設け、楽に博物館にお出でいただけるように配慮しました。トンネル内では、LEDを利用した光の演出が行われており、日常と違う空間へ近づきつつあることを来館者が感じていることと思います。もう一つのアクセス道路として、太宰府市が整備した遊歩道が、西鉄太宰府駅から枯山水の庭園や紅葉で有名な光明禅寺を經由して博物館まで伸びています。ベビーバギーの利用者や車椅子の方々についてはリフトを使用いただいておりますが、昇降に時間がとられるため、十分見学に時間をあてられなかったという声もあります。一考を要するところだと思っています。

館内では1階から3・4階の展示会場への移動にエレベーターをご利用いただけるため、東京国立博物館など先行三館に比べて、バリアフリーの条件を満たしています。そのためもあってか、高齢者に加えて障害者や乳幼児連れの方々が多数来館されています。特に障害者の方々が、盲導犬や介助者とともに解説を聞きながら展示を楽しんでおられる様子は感動的です。点字解説についても今後充実させていく予定です。日用品の使い勝手に焦点が当てられてきた感のあるユニバーサルデザインの考え方を、快適な観覧・展示環境や建物すべてについてどう応用すればよいのか、九州大学芸術工科院と共同研究を実施しています。その成果が大変楽しみです。

## 博物館としての特色

建物やアクセスに続き、博物館としての九博の性格について見ていくことにしましょう。文化庁が新構想博物館（今日の九博）にかかわる委員会を設置したのが12年ほど前のこととなります。先行する国立三館（1872年創立の東京国立博物館、1895年の京都国立博物館、1897年の奈良国立博物館）は、わが国歴代の首都に置かれ、それぞれ特徴ある専門性をもっています。仏教伝来以来変わることなくわが国における仏教文化の中心地であり続ける奈良に設置された奈良博はアジア各地で花開いた仏教文

化と美術に、また明治時代初めまで1100年にわたって天皇や貴族が住んでいた京都にある京博は日本の伝統文化と美術に特化した博物館です。一方首都東京にある、わが国最古最大の博物館・東博は、日本とアジア諸地域の伝統文化と美術を日本人及び外国人の来館者のために展示する博物館といえます。

それでは、なぜ首都になったことのない太宰府の地が九州国立博物館の設置場所に選定されたのでしょうか。また先行三館と異なるどういう特徴を持たせればいいのでしょうか。数年間にわたる議論の結果、旧石器時代にはじまり、開国政策へと転換した江戸時代末期19世紀中頃にいたるわが国の長い歴史を、アジア史的観点から取り上げる博物館とすることが決められました。すなわち数万年におよぶわが国の歴史は、わが国一国だけで完結するものではなく、アジアを中心とする諸外国との交流を通じて形成されてきたことを再認識する機会を提供する博物館として構想されたのです。21世紀にはアジア地域が欧米に取って代わって重要な役割を果たすことが期待されており、わが国のアジア重視の姿勢が九博設置にあらわれています。

### 設置場所の選定 「文化は西から、九州から」

福岡市博物館の収蔵品に、江戸時代中頃志賀島で発見され、筑前藩主黒田家に長く伝えられた国宝金印があります。1978年に黒田家より福岡市に寄贈され、市博で常設展示されています。『後漢書』に記されていた、紀元57年に光武帝から「漢委奴国王」に下賜された印綬とみなされることから、福岡地域には紀元1世紀に後漢の皇帝から外臣として認められるほどの勢力を持った国王がいたことがわかります。また7世紀の白村江の敗戦をうけて西海道を統括する役所（那津の官家）が南に移されました。現在都府楼跡として知られる、行政・外交・軍事の拠点大宰府政庁のことです。外敵から守るために、高さ10m長さ1.2kmにわたる一大土木工事をともなう防衛線の水城が設けられました。文化交流展示室入口手前に模型で水城築造の様子を示しています。博多湾側の濠に上流から水を引き込む地下水路用大型板材の実物（江戸時代に発掘されたもの。観世音寺所蔵）を模型のそばに展示しています。大規模土木工事を行ってでも守らなければならないほど、律令時代にこの地方が果たしていた重要な役割を実感させてくれます。朝鮮半島や中国大陸に近いところから、首都となったことこそないものの、福岡平野を經由してさまざまな海外からの影響が日本各地に広がっていきました。そのために太宰府の地が選ばれ、九博が「文化は西から、九州から」というキャッチフレーズを用いるようになったのです。

## 文化交流展示室

では、具体的にどのようにわが国の歴史を展示しているのでしょうか。4階の文化交流展示室のうち中央展示室（1500m<sup>2</sup>）では、アジアを中心とする諸外国との交流によって形づくられたわが国の歴史（旧石器時代から江戸時代末期まで）を、五つの時代（旧石器～縄文時代・弥生～古墳時代・飛鳥奈良平安時代・鎌倉～室町時代・江戸時代）にわけて展示しています。旧石器文化のひろがり・稲作の定着・仏教や律令制度の伝来・モンゴル帝国との接触・宣教師の来航といった、わが国社会の仕組みを大きく変えることになる出来事をもって、五つの画期の始まりとしています。来館者それぞれが自身の興味にもとづいて自由に見学出来るように、興味のある時代からでも、わが国の歴史の初めからでも、あるいは逆に遡って見てもいいように、動線は設定していません。

中央展示室の周囲に配置された12の小部屋（計2500m<sup>2</sup>）の多くは関連展示室となっており、各時代についてさらに深く学びたい来館者のためにさまざまな資料を展示しています。そのうちの一つだけ、「シルクロードと遣唐使」の部屋を紹介します。ローマガラス・ペルシャガラスや銀器など、地中海世界と中国（と奈良）を結ぶシルクロードを実際に旅した作品を陳列するほか、博多湾に係留中の遣唐使船の甲板を想定復元しています。網代帆をはさんで、甲板の左右に、わが国の使節が中国皇帝に献上したもの、そして中国皇帝から下賜されたものの複製各種が並べられています。厳密な考証に基づいてつくられた再現文化財やスパイス（当時は医薬品としての役割が主）や白檀片など、一部については来館者が自由に触ったり匂いを嗅いだりできるようにしています。ケース越しではなく、五感を総動員してものに触れ実感してほしいと思ったからです。予想以上に来館者から好評を得ています。

## 運営面と教育普及面での新機軸

九州国立博物館と呼ばれていますが、独立行政法人と福岡県立アジア文化交流センターによる共同運営で、実態はジョイントベンチャーといえます。研究員はあわせて25名います。建物にかかった費用230億円を、文化庁（5割）・福岡県（4割）・財界および市民による募金（1割）で分担している点も、従来の国立博物館の枠組みを超えるものとなっています。

私たちは、子どもたちを21世紀の主役で将来の来館者の核となるべき存在と考えています。小さいところから博物館に親んでもらいたいと思って、1階エントランスロビー奥に「あじっば（アジアの原っぱからの造語）」を設けました。そこには、歴史上わが国と縁が深い、韓国・中国・タイ・インドネシア・オランダ・ポルトガルの



コーナーを設け、現地で買い付けてきた同じ種類の日用品（洋服・仮面・おもちゃ・ゲーム・食器など）を並べています。これらを子どもたちは実際に手にとって遊んでみたり、身にまもってみられます。ボランティアさんに一緒に遊んでもらえます。同じ用途であっても、各国それぞれに模様・材質・形が違っていたりするので、比較すると色々なことがわかってきます。また少人数限定ですが、博物館資料（教育参考資料）を手にとって観察したり、記述したり、展示ケースに資料を並べてみたり、ライティングをどう工夫するか、またどのような題箋や解説を用意するかなど考えながら、学芸員の仕事を体験することができるような仕組みもあります。また学芸員課程履修中の大学生向けの博物館実習だけでなく、高校生を対象とするジュニア学芸員養成講座も実施しています。

われわれにとってのミッションステートメントは、「市民とともにある博物館」です。そしていつ来ても新しい発見と感動がある「生きている博物館」を目指しています。そのために数多くのイベントを開催し、従来博物館に足を向けることのなかった人々にも博物館にまず来ていただくことを心がけています。そこから博物館の展示へと興味がひろがっていくことを期待しているからです。

## ☆西南学院大学博物館に望むこと

これまで、旭山動物園、金沢21世紀美術館と九州国立博物館におけるさまざまな取り組みを紹介してきました。特に九博については、その沿革も含め詳しく触れました。三つの組織それぞれが実施している、多くの来館（園）者を迎えるための配慮や工夫についてもお分かりいただけたのではないかと思います。

以下西南学院大学博物館に望むことを、いくつか具体的に挙げてみたいと思います。

キリスト教を理解するには、その生まれた時代背景、場所やその後の歴史を知ることが不可欠であり、その関係の展示を充実していただくことが西南学院大学博物館にとって最優先課題であることは言うまでもありません。しかしそれだけではなく、キリスト教にとって直接の源泉であるユダヤ教も、またキリスト教同様そこから生まれたイスラム教についても学べるようにしていただきたいと思います。聖典、儀式にともなう聖具・衣装・燭台などに加え、それぞれの儀式、伴奏や説教の様子を記録したビデオも提供していただければと思います。また聖書によく触れられる「乳香」や「没薬」のようなものについても、実物展示とともに香りを嗅いだり、触れてみたいものです。

博物館のパンフレットを見て、聖書植物園が整備されていることに気がつきました。

九博の関連展示室内に復元した遣唐使船の甲板同様、実際の植物（季節によっては花や実も）を身近に見たり触ったり、匂いを嗅いだりできる工夫がされていることに共感しました。イギリスの諺とも、孔子由来とも言われていますが、参加型学習の原則は以下のようにまとめることができます。

聞いたことは 忘れる I hear and I forget,

見たことは 覚える I see and I remember,

やったことは わかる I do and I understand.

さらに「見つけた（発見した）ことは できる I find (discover) and I can.」と最後につけくわえられることもあります。

五感を利用した体験を通してさまざまなことが実感でき、記憶に残るとされています。ぜひともそういう仕掛けを多く作っていただきたいと思います。

博物館は、美術品や考古遺物の展示を通じて、過去に学ぶ機会を提供する社会教育機関です。すなわち過去を知ることはすぐれて今日われわれが進むべき将来について考えることに他なりません。この大学博物館には明るい展示室に機能的で見やすいケース類が配置され、興味深い収蔵品が展示されていました。収蔵品はまだ十分な数が揃っていないと思いますが、作品の保存と適切な展示期間を守るためにも、今後引き続き充実した収集を理事会の先生方にはお願いしたいと思います。

エルサレムは、ユダヤ教・キリスト教そしてイスラム教それぞれにとっての聖地です。学部や大学院でなされる地域研究の成果を展示に活かし、世界平和を希求するメッセージを発信していくような道も考えていただけないでしょうか。

そして、この建物はもともとキリスト教のチャペルですが、今後は宗派や信条を問わず祈りを捧げたいと思う人々のための場所が設けられるとよいと思います。

本日でめでたく開館したばかりの西南学院大学博物館の一層のご発展を切にお祈り申し上げます。ご静聴ありがとうございました。

(2006年5月13日 西南学院大学博物館開館記念講演より)